



R18

異世界転移恋愛奇譚

ゆるふわメイドと機関銃

相山タツヤ

第一章『ある日、メイドを拾った』

——この先、どうやって生きていけば良いんだろうな……。――

深夜。俺は、近所にある広い公園の道をあてもなく歩きながら、大きな溜め息を漏らした。

つい一週間前まで俺は、個人経営の居酒屋の店員だった。

しかし、人員不足による目が回るような過労の日々と、嫌味ったらしい文句ばかりの店長に嫌気が差し、ついに限界を迎えた俺は一切の連絡を断ち切りバックれたのだ。

本当は無断欠勤からの失踪なんて礼儀知らずな手段は取りたくなかったが、今まで店長に辞めたいと伝えた他のスタッフがどれだけの罵倒を受け傷めつけられる運命を辿るのか、俺はよく見てきている。人としての道理がない相手に、こちら筋を通す必要なんてあるとは思わない。

電話を着信拒否して一週間は、自宅にまで店長が押しかけてくる悪夢にうなされたものだが、それが現実化することはなく杞憂に終わり、今はひとまず平穏な生活を送ることはできている。

だがすぐに、次の大きな課題が立ちはだかつてきた。

それは、生活費を稼ぐため、新たな職場を探さなければならぬという困難だ。

……クソッ、働きたくなえよ……！！

店長に罵倒を受けた日々が脳に次々と蘇ってきて、自然と手が震えた。

人を奴隷としか思わないモンスター上司が、この世には何処にでもはびこっている。

どうして生きるために、死ぬほど苦しめられなければならないのか。俺には理解できない。

こんな事になるなら、学生の頃から怠けずもつと真面目に勉強していればよかった。夢のホワイト企業への切符を手に入れることができるのは、絶やさず勉強に努め、名だたる上位の難関大学に入り、そして激しい就活競争を勝ち抜いたものだけだ。

俺は、その競争に敗北し続けて、いまはこの有様になっている。人よりも努力が足りなかったと言われればそれまでだが、今のところリベンジの機会にも恵まれず、負け組らしい人生をただひたすら転がり落ちている。

……もう、生きていたって面倒くせえ……こうなったら、死んでやるか……？

俺は立ち止まって、生い茂る公園の暗い木々を見つめ、そこにロープをぶら下げる想像をする。

しかしすぐに恐怖がこみ上げてきて、俺は頭を横に振るう。

……嫌だ、死にたくない……！ ゴミみたいに死ぬなんて、まっぴらだ……！

だが生き続けるためには、この社会で働かなければならない。

優れた学歴も技能も無い俺には、仕事を選ぶ権利はほとんど与えられず、辛い仕事を低い給料で甘んじて受け入れるしかない。

……せめて、俺にも彼女がいれば……。

俺を支えてくれる異性が一人いるだけでも、俺の人生は大きく変わる。そう強く思える。

だがそんな都合の良い夢が実現するはずがなく、今日まで俺は童貞という重い枷を引きずり続けていた。

この世に絶望しながら、再び力なく歩き出そうとした時、突然、静電気が走ったよ

うに空気が張り詰めた。

「何だ？ —— うわっ！！」

その直後、頭上で眩い閃光が現れて炸裂した。

驚き怯んでいると、光の中から人影のようなものが降ってきて、俺は避け切れず盛大に下敷きになって倒れてしまった。

「……いてて……！ な、なんだよコレ……！」

痛む頭をさすりながら起き上がろうとして、気付く。

俺の身体の上に、一人の少女が意識を失って倒れていた。状況から考えて、あの光の中から落ちてきたらしい。

「え…………？」

外国人のような可憐な顔立ちをした金髪ツインテールの少女で、水色のメイド服を着ている。あまりに浮世離れした格好なので初めは人形かと思ったが、触ると体温があり、暖かい。

「ど、どうということ…………？」

不可抗力で、もがいた右手が少女の胸に触れてしまった。

ふにゅっとした感触と共に、指が柔らかく沈み込む。顔の幼さに似合わず、少女の胸は丸くて大きい。

「…………や、やばいって…………！」

寝ている少女に悪戯するほど肝は据わっていないので、俺はどうにか身を起こして、少女の肩を揺らす。

「大丈夫……？　おい、起きて！」

すると少女は、閉じていた目蓋をぴくりと震わせて、ゆっくりと目を開いていく。綺麗なブルーの瞳が、俺を見つめた。

「……あ、起きた……？」

そして。

「きゃ————っ！！！」

ツインテールの少女は、釣られた大魚よりも派手に跳ねて、すぐさま俺から飛び退き、地面をごろごろと転がって回避し、やがて脇の花壇に派手に突っ込んで動かなくなった。

「お、おい……!!」

いきなり大声を出されて死ぬほど驚いた俺は、なんとか呼吸を整えながら、慌てて弁明する。

「落ち着け、変質者じゃないって……! 君の方から、俺に落ちてきたんだよ……!」

自分でも意味が分からないが、実際そうとしか表現しようがない。

少女は、土と花びらを髪に引っ付けたままの頭を起こして、恐る恐る俺を観察し、ようやく口を開く。

「わ……わるいひとじゃ、ないんですか……？」

尋ねられ、とりあえず俺も動揺しながら頷く。

「あ、ああ……悪い人じゃない。ただ、通りがかっただけだ……」

すると少女は、三秒くらい俺の顔を見つめてから、肩を大きく落とす。

「よ、よかったあ……ついに、もう死んじゃうのかと思いました……！」

「何……？」

訝しげに眺めていると、少女は目にうるうるすると涙を溜めて泣き出してしまった。

「え？　ど、どうした……？」

「うう……ひつく……聞いてください……わたし……役立たずだって、屋敷を放り出されちゃったんです……！」

「屋敷？　役立たず？」

「わたし、がんばったのに……ご主人様を守り切れなくて……それで、怒られて……どこか遠くに行ってしまうって、魔法を掛けられて……」

そこからは、子供のようになんて泣き始めてしまい言葉にならなかった。

まさか異世界から飛ばされてきたとでも言うつもりなのだろうか。とても現実の話だとは信じられないが、確かにこの少女は空中から突現出現して落ちてきた。まさか、そんなことが有り得るのか。

「えーと……君は、何処から来たの？」

恐々とそう質問してみると、ツイントールの少女はぐずりながら、全く聞いたことのない国と地名の名前を出してきた。一応すぐにスマートフォンで検索してみたが、そんな場所はこの世の何処にも存在しない。

「まさか、君は本当に異世界から来たのか……？」

「いせかい……？ いせかいって何ですかあ……」

いくらか落ち着いてきた少女は、不思議そうに周囲を見回す。

「どこ……どこなんですか……？」

尋ねられた俺は、多分伝わらないだろうなと思いつつ、こここの地名を告げてみる。

「ええ……知りません、そんなところ……！ まさか……ここって、違う世界なんですか……？」

俺は頭を掻いてどう答えるべきか迷ったが、少女はその様子から現状を悟ったようで、再びわぁんと泣き出す。

「あんまりですよ……！ ひどいです、帰れないじゃないですかあ……！ わたしだって、ご主人様の為にせいっぱいがんばったのに……ひどすぎます……！！」

まだ理解できない事だらけだが、彼女の周辺の状況だけは何となく分かってきた。少女は異世界の『ご主人様』に仕えるメイドで、何かしらの大きな不手際を起こして主人の怒りを買って、罰としてこの世界に吹き飛ばされてきたという様子らしい。

こういう時、俺はどうすれば良いだろうか。

交番に連れて行けば、とりあえず俺は厄介事からは逃れられそうだが、その代わりこの少女はさらに辛い面倒な事に巻き込まれていくのは間違いない。彼女が身分証明書なんて持っているわけもなく、そもそも帰る家が無い。警察官と話が噛み合うわけがなく、最終的には精神を疑われて病院に連れていかれる羽目になるかもしれない。

俺はアニメや漫画のファンタジー作品は好んでよく見るから、この状況への理解にはそれほど抵抗感はないが、実際こう遭遇してみると対応に非常に困らされる。

「わあああん……！　こんなひどいご主人様なんて、もう大っ嫌いです！　絶交です……！　わあああん……！」

「とりあえず……まあ、落ち着いて……！」

いまは深夜で周りには誰もいないが、流石に大声を出し続けられると、何か事件で

も起こったのかと勘違いされてしまう。

とりあえず話しかけて、落ち着いてもらうしかない。

「えーと、君の名前は……？」

俺はとりあえず、持っていたハンカチを差し出す。

「……………メリル、です……………」

その少女、メリルは、遠慮がちにハンカチを受け取った。

俺としては涙を拭いてもらうつもりだったのが、メリルはそのハンカチを髪の毛の土を払うのに使い始める。

「あ、あなたは……………誰ですか……………？」

「近所に住んでる、ただのフリーター……怪しいもんじゃない」

「ありがたい、ごさいます……タダノフリーターさん」

土で汚れたハンカチを返された。そして、俺の名前は『タダノフリーター』になっ
たらしい。

「まだ、土、ついてるよ……ちょっとごめん」

メリルの髪についた残りの土を手で払ってやった。

彼女は、ぽーっとした様子で俺をしばらく見つめてから、唐突に切り出す。

「あの、タダノフリーターさん……わたしのこと、助けてくれませんか……!?!」

潤んだ瞳で、メリルは俺の手をぎゅっと握りしめる。

「助けてくれないと……死んじゃいます……!!」

「落ち着けて……!! 早まるな……!!」

「本気でしよう……!! わたし一人で、こんな世界で生きるなんて無理です……!!」

「だから物騒に聞こえるからやめろって!!」

そこでちょうど、こんな深夜にランニングをしているらしい老人が通りすがり、無言の冷たい視線を向けてそのまま走り去っていった。別れ話を切り出す彼氏と、別れるなら死んでやると言い張るメンヘラ系彼女のカップルに見えたに違いない。

「……わ、分かった! 分かったから、落ち着け。とりあえず、俺がやれることで良ければ、力になるよ……!」

そう言うと、メリルの表情がパッと明るくなった。

「ありがとうございます……！ 代わりに、わたしも、タダノフリーターさんのこと、全力でお世話しますね……！ 今日から、新しいご主人様です！」

「えっ？ お、お世話……？ ご主人……？」

メリルは顔をぐっと近づけてきて、握った俺の手をぶんぶんと振った。

「お世話になる恩返しです！ わたしに任せて、ご主人様！ 何にも出来ないけど、頑張ります！！」

何にも出来ないけど頑張るって何なんだ。そんな無茶苦茶な精神論、居酒屋でも聞いたことがない。

しかし、メリルの無邪気だが元気すぎる迫力に押され、ひとまず俺は頷くしかなかった。

まさか俺の鬱屈した日常を、ここまで綺麗に消し飛ばす存在が現れるとは。いったい、人生は何が起こるか分からない。

とにかく俺はこの日、異世界のメイドを拾うことになった。

第二章 『初めてののご奉仕』

俺は緊張しながら、メリルを俺が住むアパートの一室に招いた。

その日に初めて出会った少女を自宅に連れ込むなんて順番を飛ばし過ぎている気がするが、他に選択肢も思いつかないので仕方がない。

メリルは靴を脱いで、軽快に玄関を上がる。この一人暮らしの部屋に、初めて異性が入った瞬間だ。

「おじやましまーす！ ここは物置ですかー？」

「……すまん、俺の家だ」

客人を上げることなど全く想定していないので、このワンルームの部屋は散らかり放題だ。脱ぎ捨てた衣類、漫画や雑誌、ゲームやCD、コンビニの袋に入ったゴミなど雑多なものがあちこちに所狭しと落ちていて、布団も当然ながら隅に敷きっぱなし。こんなことになるなら、普段から掃除しておくべきだった。

「汚くてごめん。今、ちょっと掃除するから……」

「あっ、お掃除ですか？ それなら、わたし、やります！」

メリルは元気よく右手をピンツと上げた。手先が上の電灯にバゴツと当たり、積もった埃がボワツと落ちていく。

「いやいや……流石にそれは悪いって。自分でやるよ」

仮にも初めて家に来た異性に対し、まず自分の部屋を掃除してもらうなど、みっともないことこの上ない。

「いえいえ、ご主人様に恩返しするって決めたんですから！ お掃除くらい、多分できます！」

「多分？」

「多分！」

メリルが力強く一步を踏み出した時、足元でベキッと嫌な音が鳴った。見ると、メリルの足の下に、俺のお気に入りのアニメソングのCDケースがある。

「あっ……！！　なんか、踏んじやいました……！」

「……いや、床に置きざらしにしてた俺が悪い。俺自身、いつか踏んでたかも。メリルは休んでていいから、俺が……」

「あ、いえいえ……！ 大丈夫です、わたしが……」

続いてメリルが踏み出した二歩目は、俺の好きな恋愛シュミレーションゲームのケースをベゴリッと踏んだ。

「それ以上、いけない。掃除は俺がするから、メリルは休んでて」

「ええ……？ でも……」

「えーと……ご主人様からの命令だ。メリルは休んでていいから」

俺は気を遣ってそう言ったつもりだったが、メリルはひどく悲しそうな目で俺を見

つめる。

……ああ、そうか。

今のメリルと似た状況を、俺自身が経験したことがある。

大学時代、初めてのアルバイト先であったスーパーで、店長にそんな事を言われた記憶があった。俺自身は精一杯に努力して仕事を覚えようとしたが、不慣れから多くのミスをしてしまい、途中で別の経験豊富な新人アルバイトが入ってきたこともあって、店長からは冷遇され俺に任される仕事は減っていった。半年経っても、レジにすら一切触らせてもらえず、与えられた仕事は掃除と見回りだけ。そんな飼い殺しのストレスに耐え切れず、俺は精神を病んで辞めることになった。

与えられる仕事が多くても過酷だが、仕事を与えられないのもまた苦痛。人間とはつくづく面倒な生き物だと思う。

「……分かった。悪い。掃除は、とりあえず一緒にやろう」

そう言うと、メリルは分かりやすく眼差しを明るくする。

「了解です——！ わたし、頑張ります！ 何でも命令してくださいあい！」

調子よく言ったメリルの三步目が、俺が大好きなアニメの限定特典DVDをボギツと踏んだ。

そうして二人で掃除を始め、一時間経たないうちに、俺の自室は模範的な綺麗さを取り戻した。これほど床が広々と見えるのはいつぶりだろうか。

しみじみと感じている間もなく、最後の仕上げに柵の埃を払っていたメリルが、飾っていた美少女メイドの可動フィギュアを落下させてしまった。床に当たって、惨めに片腕がすっ飛んでいってしまう。

「ご、ご主人様あ……！ ごめんなさい……！」

「ああ……いいよ、別に。もともと腕の関節がゆるくて外れやすいし」

掃除中に多くのコレクションが損傷する羽目になったが、本物の異世界メイド少女が俺の部屋を掃除しているという刺激が強すぎて、もう色々と思考が超越してしまい怒りも何も湧いてこない。むしろ、コレクションをいくつか犠牲にして、本物のメイドを手に入れたという対価交換の感覚すらある。

「お掃除、完了ですね！ ご主人様、どうですか？ もし良かったら、ほめてくださいー！」

「え？ あ、ああ……ありがとう。感謝してるよ。こういう機会が無かったら、いざれ俺は腐ってゴミの山に埋もれてたかもしれないし」

「じゃあ、頭、なでてください！」

「……ん？」

ずいっとメリルが近づいてきて、頭を傾けてくる。

「なでてくれたら、もっと頑張れます！」

流石に反応に困るが、うきうきとした様子で待ち構えているメリルの期待は裏切れず、俺は恐る恐る、小動物を撫でる感覚で頭をさすってやる。

するとメリルは飛び上がらんばかりの勢いで満面の笑みで喜び始めた。

「ありがとうございますう！ 嬉しいです！ ご主人様のために、もっと頑張っちゃいますからね！」

よせばいいのに狭い部屋の中をトコトコと走り回って、柵にぶつかり、その衝撃で二体目のメイドのフィギュアが床に落ちて両腕が飛んで行った。

「ご主人様、お腹は空いてますかー？ ごはん、作りますか？」

「あっ、それは……なかなかいいな。お願いしたいかも」

俺だけの為の手料理を振舞ってもらえるなんて、これほど高揚するイベントはない。

「ちなみに、どんなものを作るんだ？」

「えーと、白米に卵かけたやつとか！」

「卵かけご飯？」

「あと、パンを焼いたやつとか！」

「それって、普通にトースト？」

「あとは……以上です！」

俺は無言でコクリと頷いた。

「分かった。今は、あまりお腹は空いてないな。朝になったら、一緒に何かつくろう」

「分かりましたー！ 頑張りますね！」

そうテンション高く言ってから、メリルはまじまじと上目遣いで俺を見つめ始める。

「他に何か……してほしいこと、ありますか……？」

一瞬、邪な考えが頭を掠めて、俺はごくりと唾を飲む。

掃除は済んだし、食事も後でいい。こんな夜、メイドにしてほしい事として思い当たるものは。

自然と、彼女のふくよかな胸に視線が向かってしまう。

初めてそれを使った時の、あの柔らかい感触を思い出して、否応にも股間がぴくりと反応し始める。

……いや、駄目だ！

彼女は善意で俺に恩返しをするため、慣れない家事を一生懸命にこなそうとしてい

るのだ。その純粋な気持ち悪用して汚すわけにはいかない。

無言で葛藤していると、メリルは無邪気にとんでもない事を言った。

「ご主人様、眠いですか？ それなら、添い寝とかどうですか！」

彼女の方からそんな提案が出てきて、俺は戸惑う。

「そっ、添い寝!？」

「はい！ わたしは初めてですけど、元のご主人様はお気に入りメイドさんを毎晩呼んで、添い寝させてましたよ？」

「……あの……それって、本当に、添い寝だけ？」

「え？ 何か違うんですか？ 二人で寝室に入ったんだから、一緒に添い寝してるんだと思いますよ？」

俺は目頭を強くつまんでううむと唸り、次の台詞を慎重に探す。

「……えーっと、ちなみに聞くけど……メリルは、俺と添い寝するのは嫌じゃないか？」

「嫌なんかじゃないです！ ご主人様にそこまでしてもらえたら、すごく嬉しいですよ！
それって、ご主人様のお気に入りになれるってことですよ？ 嬉しすぎて、もっと頑張れちゃいますー！」

メリルの言葉に性的なニュアンスは全く含まれていない。仕える主人と添い寝をすることが、メイドとしての大きなステータスになると純粹に考えているようだ。

……これは、合意の上だ。俺は悪くない。しかも、ここで断ったらまた彼女を傷つけてしまうじゃないか。

俺は心の中で強く自己弁護をしてから、頷く。

「分かった。……添い寝を、頼む」

「分かりましたー！ ご指名、ありがとうございます！ これで、わたしも一人前のメイドですね！」

「た……多分な」

俺は齒磨きと髭剃りをしてから、照明を常夜灯に切り替え、トランクスにTシャツだけといういつもの格好になって布団に入る。

だが今日は、異世界の客人が居る。布団の中に、メリルが躊躇なく潜り込んできた。

「ご主人様、狭くないですかー？ 大丈夫ですか？」

布団は当然ながら一人用なので、ほとんどくっつきそうな至近距離で寄り添う形になってしまう。

「俺は大丈夫だけど……メリルはきつくはないか？」

「へっちらです！ 狭い倉庫で寝るのは、慣れてますから！」

メリルは、「へへへっ」と健気に笑って見せる。

「……そうか、大変なんだな、メリルも。ごめんな、こんなみすぼらしい男一人の家で……」

「わたしの事は、気にしないでくださいっ！ ご主人様は、黙って添い寝されていれ
ばいいんですう！」

なぜかムキになって、メリルは俺の胸元に飛び込んでくる。

「わっ……!!」

ふんわりと温かいメリルの感触に、俺はどぎまぎする。

「今は、わたしがご奉仕してるんですよ？ ご主人様は余計な心配しなくて大丈夫で
す！ ご主人様の為になれば、わたしも嬉しいんですから！」

俺の胸元で優しく頬ずりして、甘えてくる。

「ちよっ、ちよっと、メリルっ……!!」

「あ、子守歌とか歌ってあげますか？ それとも童話の読み聞かせとか？ ご主人様が気持ちよくおねんねできるように、何でも頑張りますよー？」

彼女の豊満な胸が自然とぎゅっと押しつけられてきて、俺はとうとう勃起を我慢できなくなる。

「めっ、メリル、少し離れてくれないと……何と言うか……変なことになる……」

「ええ？ 変なことって何ですかあ？ 面白そう！ 教えてくださいー！」

「ちよ、ちよっと……」

ついにトランクスの下で、ムクムクと硬化した俺の雄が立派なテントを張ってしま

い、不可抗力で、その先端が彼女の下腹部にぐっと押し当たってしまった。

「ん……？　ご主人様、何かお腹に当たってますよー？　これ、何ですか？」

メリルは、本気でその正体分からないという様子で、興味津々にそれを右手で探り始める。

彼女の指がトランクス（下着）の布越しに雄の筒先をさわさわと撫で、俺は未知の感触に小さく呻く。

「えー、何ですかこれ？　んー？　あったかくて、かたいけど、やわらかい……？」

箱の中身当てクイズのような感覚で、メリルはどんどん強引にそれを弄り回す。

指先が亀頭の先端をくりくりとほじったかと思うと、今度は幹の方まで手が降りてきて上下にゆったりと擦り始める。

自分の手で行う自慰とは全く異なる、制御が効かないこの鋭い快感に、俺は悶え続ける。

「あれっ、ご主人様、大丈夫ですか？」

「だ、大丈夫っ……」

真実を言い出せず、俺はそれだけ言って押し黙る。

「ご主人様？ おパンツの中に、何を隠してるんですか？ ひょっとして、食べ物ですか？」

メリルは無邪気に悩みながら見つめてくる。

もしここで俺が食べ物だと答えたなら、その小さい唇で俺の雄を啜えてくれるのだからか。

性欲がこみ上げてきて、ますます下劣な想像が湧き上がってくる。

「うーん……ぜんぜん分かんないです！　こうなったら、当てるまで頑張りますよ！」

性教育を充分に受けていないのか、天然のメリルは純粋な好奇心で俺のトランクスに直接手を突っ込んだ。

少しひんやりした指が、熱い雄に直に触れた。彼女はそのまま、グニグニとこねくり回し始める。

容赦のない強い刺激に、射精欲が昇り上がってきて、俺はやっこの思いで震える息を吐く。

「んー……熱くて……ちょっとぬるっとしてる？　食べ物？　生き物？　うーん、分

「かないですう……」

俺はどうとう吹っ切れて、興味津々に俺の雄を触り続けるメリルの細い手を強く掴んだ。

「えっ!? ご主人様？」

彼女の指を絡め合わせながら、一緒に雄を強くしごいて、限界へと向かっていく。先走り液で濡れているメリルの指が熱く溶け合って、もはや性交同然の感覚だった。

「ごっ、ご主人様あ……」

雰囲気から熱が移ってきたのか、メリルは顔を少し赤らめる。

俺はついに限界を迎え、握りしめたメリルの右手の中に勢いよく精を放った。決壊

したように奔流となって流れ出す熱い精子が、彼女の手を白いドロドロで穢していく。

「わあっ……！　なにか出てきましたよ、ご主人様！？　乳搾りみたいです！」

あろうことかメリルは面白がって、俺の雄を掴んでにゆるにゆると強く擦る。残る精子も容赦なく絞り出されていき、怒涛の快樂の波に吞まれて俺は呼吸が止まる。

「わあ、面白いです……！　あったかくて、どろどろ！　でも……これ、何ですか？」

もはや俺のトランクスの中とメリルの手は精子だらけだ。

メリルは萎んでいく俺の雄をいじりつづけ、ついにその根元を探った。

「え……これ、ご主人様の身体と、つながってる？　えっ？」

俺は非常に大変なことをしてかしてしまったという自覚はあるが、もはや弁明の言

葉まで絞り出す気力は残っていなかった。

ついにメリルは、今まで触っていた物体の正体を知った。

「ひょっとして、もしかして……ご主人様の——おちんちん!？」

スロットマシンでジャックポットの大当たりが出たような大興奮の顔で、メリルは俺を見つめる。

「ご主人様のおちんちんって、こんな感じなんですか！ 知らなかったです！ 面白いです!!」

「な、なに……?」

「だって、おちんちんって、ちっちゃくて、ふにょんとしてるじゃないですか！ あんなに固くておっきくなるんですね！　すごいですがご主人様！　すごい！！」

斜め上すぎるリアクションに、ぐったりとした俺は言葉を失う。

「じゃあ、これってご主人様のおしっこ？　でも、ねばねばしてます。本当にミルクだったりするんですかー？」

よせばいいのに、メリルは躊躇なく右手についた精子を舐める。

「わあっ……っすごい変な味です！　でも、嫌じゃないです……ご主人様っぽい味がします！」

「……や、やめれ」

そのまま俺の精子のテイスティングを続行しようとするメリルを止める。

「ごめん……手を洗ってきた方がいいよ。それは、あんまり飲むものじゃないから……」

「えーっ。もったいないですよ。舐めれば舐めるほど、なんか好きな味です……」

メリルはそう言って、手についた精子を愛おしそうに舐めた。

その姿を見て理性が再び崩れてきて、現実か夢かも曖昧になってきた頭で俺はメリルに言う。

「メリル……直接、舐めてみるか……?」

「いいんですか……? ご主人様」

「でも、もし嫌だったら、無理しなくても……」

「ううん。舐めたいです。ご主人様の味」

メリルは無邪気に微笑んで、さっそく布団の中に潜り込んだ。

試読版は以上です。続きは本編で！

異世界転移恋愛奇譚
ゆるふわメイドと機関銃
相山タツヤ

